

否定文における単純形と do 迂言形の共存と使い分け

18 世紀の小説を中心に

片見彰夫

1. はじめに

Engblom や Ellegård の研究では、1700 年頃には否定文における do not 型が一般化していたとされる。しかし、Iyeiri、秋元らの研究は、18 世紀以降にも know not, doubt not などの「動詞+not」型が残存していたことを示している。本研究の目的は、18 世紀英語において do 迂言形が標準化しつつも、単純形がなお生き残っていたことを示し、両形式の使い分けに関わる要因を文脈・文体・語用論の観点から考察することである。

2. 否定文の歴史

古英語では否定辞 ne が用いられたが、中英語期には ne と not が併用され、やがて ne が脱落して not のみが残った。その結果、I say not 型が成立し、さらに近代英語期には I do not say 型が発達した。歴史的には、I say not 型と I do not say 型が一定期間共存しており、本研究はその共存期における両形式の機能差を問題にしている。

3. 先行研究と、その課題

17 世紀後半までに do not 型が優勢になっていた。一方、18 世紀から 19 世紀にかけても単純形と迂言形の揺れが残っていた。Visser は、he did not speak 型、he not spoke 型、he spoke not 型を区別し、韻律や文体的理由を使い分けの要因として挙げているが、その文体的機能については十分に説明していない。この点を補い、単純形と迂言形の文脈上の差異を具体的に検討する。また、Lowth や Murray の規範文法書にも触れ、18 世紀後半においても二形式の共存が認識されていたことを示した。

4. 電子コーパスにおける調査と分析

believe, care, doubt, hear, know, think, understand, come, say, speak の 10 動詞を対象に、単純形と do 迂言形の生起状況を調査している。対象動詞は、認識・知覚に関わる動詞と動作動詞に分けられている。18 世紀には do 迂言形がすでに標準化しつつあったため、特に有標的な形式である単純形に注目して分析を進めた。

4.1. The Helsinki Corpus

当コーパスでは近代英語期に care, doubt, know, come など単純形の比率が高いことが示される。とくに doubt や know では単純形が高頻度で現れ、動詞ごとに do 迂言形への移行の進捗が異なることが分かる。また、単純形の主語は必ずしも一人称に限られず、he, they など見られるため、単純形は単なる固定表現ではなく、一定の生産性を保持していたと考えられる。

4.2. The CLiC Web Corpus

当コーパスでは、19 世紀小説を中心に調査を行った。全体として do 迂言形の比率が大きく高まり、単純形はかなり減少している。しかし、doubt, say, think, hear, know などでは単純形がなお生じており、完全には消滅していない。特に doubt は単純形の比率が高く、say も一定数見られる。また、19 世紀になると don't, doesn't, didn't といった縮約形が増加する点も特徴であり、do 迂言形が日常的・口語的形式として浸透していく様子が示されている。

5. 日常言語の例

日刊紙 *The Spectator* と Lady Mary Wortley Montague の書簡を取り上げ、日常言語に近い文体における単純形と迂言形の分布を分析した。文学作品だけでなく、ジャーナリズムや書簡の資料を加えることで、社会階層や文体差が否定形式の選択に与える影響を検討している。

5.1. 日刊紙

The Spectator では、believe, hear, understand, say, speak に単純形が現れず、do 迂言形が広く用いられている。これは、18 世紀前半の識字層向けジャーナリズムにおいて、do 否定文がかなり浸透していたことを示す。ただし、doubt や know では単純形も見られ、とくに I doubt not や I know not のように一人称主語と結びつく例が目立つ。

5.2. 書簡

Lady Mary Wortley Montague の書簡では、believe, hear, think, understand, say に単純形が見られず、上流階級の書簡文体では do 否定文が標準化しつつあったことが分かるが、know については例外的に単純形が多く生じている。

6. 18 世紀小説における生起例と、その文脈

単純形と do 迂言形の具体的な用例を文脈に即して分析している。全体として、単純形と迂言形はどの作家にも見られるが、動詞や作品によって比率に違いがある。特に doubt と know では単純形の比率が高く、think では迂言形が優勢である。小説における否定形式の選択には、作家の文体、登場人物の性格、発話場面、語りの距離

などが深く関わることを主張する。

6.1. Daniel Defoe, *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe* (1719)

Robinson Crusoe では、know not の比率が非常に高い。作品における一人称視点と写實的・内省的な語りの中で、know not は語り手の判断や不確実性を直接表す形式として機能している。doubt については、did not doubt の例が見られる一方、I doubt not も現れ、恐怖や警戒心を回顧する場面で用いられる。know not は一人称だけでなく they や Friday など主語とする例もあり、単なる定型句ではなく、生産的に用いられていたことが示唆される。

6.2. Samuel Richardson, *Pamela; or, Virtue Rewarded* (1740)

Pamela では、書簡体小説の形式を通じて、登場人物の感情や即時的反応が否定形式に反映されている。I believe not や I care not は、話者の拒絶、判断、感情の発露を示す。一方、does not believe のような迂言形は、第三者の心理状態を説明する客観的叙述に適している。単純形は主観的・即時的な判断と結びつきやすいが、heard not のように、必ずしも強い感情を伴わない叙述的用法もある。したがって、単純形の機能は一律ではなく、主語や文脈との関係から判断する必要がある。

6.3. Henry Fielding, *The History of Tom Jones, a Foundling* (1749)

Tom Jones では、単純形と事実性との関係が重要である。doubted not は過去形で多く現れ、過去の出来事を確定的に叙述する働きを持つ。I doubt not but...は、話者の確信や保証を示す表現として用いられる。一方、do not doubt は、礼儀や感情的距離を保つ形式として機能する。know not も、単なる知識不足ではなく、相手への非難や警告を含む場合がある。迂言形では indeed などの強意副詞が加わることがあり、do 迂言形の拡大に伴って、主観性や感情の強さが副詞など別の要素によって補強されるようになった可能性を指摘した。

6.4. Frances Burney, *Evelina, Or, the History of a Young Lady's Entrance into the World* (1778)

Evelina では、書簡体小説の性格により、登場人物の主観や会話の即時性が単純形の使用と結びつく。think not は命令文に現れ、相手の考えを強く否定する主観的表現として機能する。spoke not a word や said not a word は、沈黙を強調し、気まずさや緊張を描く文体的効果を持つ。一方、did not say は、相手の誤解を論理的に訂正する場面で用いられ、否定の対象を明確にする働きがある。したがって、Burney の作品では、単純形が感情・緊張・沈黙の描写に、迂言形が説明的・訂正的機能に用いられている。

6.5. Jane Austen, *Pride and Prejudice* (1813)

Pride and Prejudice では、単純形と迂言形の使い分けが、登場人物の性格や社交的文体と関係している。I know not は、Elizabeth の困惑、苛立ち、皮肉を表す場面で用いられ、I do not know whether...は、Caroline Bingley の手紙における婉曲的で社交的な表現として機能する。また、How he lived, I know not のような例では、know not が文末に置かれ、談話標識化している可能性がある。さらに、said not a word のような定型的表現が多く、19 世紀という年代では、単純形の生産性が低下し、限定されたコロケーションとして残存していることが示されている。

7. 結論

18 世紀には do 迂言形が優勢であったものの、単純形もなお少なからず存在し、独自の文体的・語用論的機能を担っていたと考えられる。単純形には、事実性、断定、決意、意思、話者の主観性が込められることが多い。特に know や doubt では、一人称主語と結びつき、話者の確信や判断を示す傾向が見られる。一方、do 迂言形は、規範文法や教育の普及とともに、上流階級や教育階層の言語に浸透していった。小説では、文学言語の保守性により単純形が温存され、登場人物の心理や文体的効果を表す手段として用いられた。また、do 迂言形が副詞や談話標識と結びつき、否定の程度や主観性を調整しやすくなったことも、単純形が置換されていく一因であった可能性がある。そして、規範文法の普及と教育階層・上流階級の言語使用が do 迂言形の拡大に関わったということ、そして単純形が、古い残存形にとどまらず、主観性・断定性・文体的効果を担う形式として働いていたことを主張した。今後の課題としては、主語の人称、自動詞・他動詞の違い、代名詞目的語を取る場合の振る舞いなど、統語的条件をさらに検討する必要がある。

主要参考文献

秋元実治 (2020) 『探偵小説の英語：後期近代英語の観点から』 開拓社./ Ellegård, Alvar (1953) *The auxiliary "Do": the establishment and regulation of its use in English*. Gothenburg Studies in English, 2. Almqvist & Wiksell./Engblom, Victor (1938) On the origin and early development of the auxiliary "Do". Lund Studies in English, 6. Gleerup. /Iyeiri, Yoko (2004) "The Use of the Auxiliary Do in Negation in *Tom Jones* and Some Other Literary Works of the Contemporary Period." in *New Trends in English Historical Linguistics: An Atlantic View*, ed. Isabel Moskowich-Spiegel Fandiño & Begoña Crespo García, 223-40. Universidade da Coruña. / Tiekken-Boon van Ostade, Ingrid. (1987) *The Auxiliary "Do" in Eighteenth-century English: A Sociohistorical-linguistic Approach*. Dordrecht: Foris Publications. /Visser, Fredericus Theodorus (1969) *An Historical Syntax of the English Language*, Vol.III, E.J. Brill.